

サタデープログラムニュース

講座番号:20番 第三部(14:00~15:30)

一番好きなことは仕事にする な！

～これから社会に出る君たちへ～



講師: 富水明さん(ビバリウムガイド編集長)

1971年、東京都生まれ。幼いころからの熱帯魚飼育の趣味を生かし、95年「月刊アクアライフ」でライターデビュー。96年にはタランチュラの飼育を扱った日本初の書籍、「タランチュラの世界」を製作し、話題を呼んだ。97年に爬虫類・両生類専門誌「季刊ビバリウムガイド」を立ち上げ、現在に至る。執筆・撮影の両方をこなし、爬虫両生類の魅力を飼育者目線で伝えている。

主な著書に「はじめてのヘビ コーンズネーク」、「ミズガメ大百科」、「可愛いヤモリと暮らす本」などがある。

出典: 「爬虫両生類の上手な飼い方」

マニアに年齢は関係ない！

小学生時代、富水さんは、図鑑などをよく読んでおり、魚、特にハイギョが好きなお子でした。そんな富水さんは、ある時、ポリプテルス・アンソルギーとポリプテルス・ラプラディという二種類のハイギョの体形のデータにほとんど違いがないことに気づきました。そこで当時の師匠であり、「アクアライフ」のハイギョの記事を担当なさっていた五十嵐利明さんにその違いを聞くと、「君はどこまで調べて僕に聞いているんだね。」と言われ、論文を貸すから自分で調べるように言われました。

それから富水さんは、借りた英語やドイツ語で記述された論文を必死に読み解き、下鰓蓋骨の大きさに違いがあることに気づきました。そのことを富水さんが五十嵐さんに伝えると「その通りだ。マニアに年齢は関係ない。君が年上の俺よりも知識を重ねていってもおかしくないし、俺はそれを全力で阻止する。」と語りました。

それから月日が立ち、富水さんが中学生になってからのことです。行動範囲の広がった富水さんは、図

鑑にも載っていない正体のわからないポリプテルスをショップで見かけるようになりました。その正体が気になった富水さんは、全てのお小遣いをそのポリプテルスに費やし、標本を作り、データをとり、ついに多種との違い、背びれが変形台形であること(他のポリプテルスのものは三角形)に気づきました。

それから、富水さんがそのことを発表すると、1998年に、ドイツで、そのポリプテルスは新種だと認められ、ポリプテルス・モケーレムベンベと名づけられました。(後に、既に知られていたポリプテルス・レトロピンニスと判明)また、その研究が五十嵐さんに認められ、1995年に、富水さんは「アクアライフ」でライターとしてデビューすることとなりました。そのことについて富水さんは、「別に学者や研究者などのプロでなくても好きなことに熱中することが大切だ。」とおっしゃいました。

「オタク」とは何なのか

富水さんが仕事をするうえで、いつも心掛けていることがあります。それは、発見を無下にしないよう、「理」、つまりなぜその事柄が起きるのかを理論づけて考えることです。好きなことだからこそ、どこまでもそれを追い求められるそうです。

「最近では、深夜アニメを2〜3本見ただけで「オタク」と呼ばれる傾向にある。しかし、本当の意味での「オタク」は、そのような浅いものではないはず。本来、「オタク」というのは、系統分類が好きな人、そしてそれを世の中の様々な事柄と重ね合わせて考えられる人のことだ。また、彼らは好きなことの側面から社会のいろいろなことを知ろうとする。つまり、「オタク」の世界は、閉じているようで開いている。」富水さんは、「オタク」という人種について、こう考えられています。

怒り、悲しみを原動力に

そもそも富水さんがビバリウムガイドを作るようになったのは、他誌への復讐のためでした。というのも、富水さんがその雑誌で記事を書いた時のことです。富水さんは、正式なライターとして記事を書かれたのですが、実際に雑誌が発行された際には、富水さんはゴーストライター扱いされており、原稿料も27,000円しか支払われませんでした。それに激怒した富水さんは、もっと売れる雑誌を作ってその出版社を見返してやりたいと考えたのです。

そもそも、当時の生物に関する本には、曖昧な口調で書かれた部分が数多くありました。本を書いている専門家が、断定をすることで、間違っただけを書いたのを恐れたためです。

しかし、その結果、ほとんどの本が中途半端に専門的になり、実際に飼育をする人には役に立たない情報が増え、つまらなくなっていました。

そこで、富水さんは、何の責任もない自分なら間違えても恨まれることもないと考え、様々なことを断定していくスタイルでビバリウムガイドを作ることにしました。また、ビバガを作り始めた時代には、インターネットが普及しつつあり、インターネットなどでほとんどの情報が得られるようになっています。

しかし、インターネットにも弱点があります。それはほとんどの記事が匿名性であること、また、画像が一枚ずつしか表示されないため、比較がしづらいことです。これらの弱点を突こうと、ビバリウムガイドに載せるあらゆる情報のもとを公開し、写真などを並べて載せ、比較しやすくしました。そこに多くの人が求める実

用的な飼育の情報を中心にするようにし、ビバリウムガイドが誕生しました。当時を振り返り、冨水さんは、「怒り、悲しみで拗ねるくらいなら、それを原動力にしたほうがいい。」と語ります。(J3 岡林)